

中国・樺太帰国者を知る集い

語り継がれる残留邦人の体験と思い

7月16日かでの2.7の会議室にて、「中国・樺太帰国者を知る集い」を開催しました。75名が参加し、戦後世代の語り部による講話と中国残留邦人の配偶者の証言に、熱心に耳を傾けました。



戦後世代の語り部 熊谷圭子さん

戦争の恐ろしさを伝えたい

集いの第一部では戦後世代の語り部の熊谷圭子さんが、15歳で満州に家族とともに渡り、40年間その地に留まることになった一人の残留婦人の体験を語りました。現在96歳になるこの女性は、ソ連軍の進攻により家族と離れ離れになり、生きるために中国人の妻となりました。56歳で帰国を果たし、現在は子どもや孫に囲まれ、幸せな毎日を過ごしていますが、「日常を壊す戦争の恐ろしさ」を経験しており、そのことを伝えたいと言います。

参加者からも「帰国者の方の話聞くことで、戦争が絶対にいけないことであることを再認識している」という声が寄せられました。

語り部事業は重要な取り組み

語り部の熊谷さんは、最後に「私がお話したのは、一人の残留婦人の個人的な体験であって、これがすべてだと思わないでほしい。他の帰国者の体験も聞いてほしい」と語りました。戦後77年が過ぎ、戦争体験者の話を直接聞くことがどんどん難しくなっています。実際に参加者の声にもありましたが、語り部育成事業は後世に伝えるための重要な取り組みだと言えます

会場からは積極的に質問が

講話の後の質疑応答の時間では、永住帰国を決めたときの女性の家族の思い、子どもや孫の日本語習得について、などの質問が寄せられました。残留邦人とその家族の苦労は戦争中だけではない、戦争が終わった後も、帰国を果たした後も続いていくということを、会場全体で共有することができました。

配偶者もともに苦勞を

第二部では、当センターで作成した「残留邦人とともに生きて」と題した映像を上映しました。残留邦人本人とは違い、あまり取り上げられないのではない配偶者に焦点を当て、生い立ちから結婚、帰国を決心するまでのいきさつ、帰国後の体験などを、3人の中国残留邦人の配偶者にインタビュー形式で語ってもらいました。事情も思いも三者三様ですが、残留邦人とともに生きて「今は幸せ」、

「みなさんに感謝」と語っているのが印象的でした。参加者のみなさんからも「配偶者の方も苦勞されてきたことを知ることができた」「苦勞されたと言いながら、明るい表情に救われる思い。感動しました。」という声が寄せられ、帰国者問題のまた別の面を知り、理解を深めるときとなりました。



道内初の公立夜間中学校開校

中国帰国者2世が入学

2022年4月に開校した札幌市立星友館中学校は、様々な理由で中学校を卒業できなかった人、不登校のために十分に学ぶことができなかった人のための夜間中学校です。この学校に中国帰国者2世紅林義さんが6月から通っています。



(星友館中学校ホームページより)

「まだ間に合いますよ」

子どもの学校の先生に勧められて

紅林さんが夜間中学校に入学するきっかけとなったのは、お子さんの通う小学校の先生でした。その時点で4月を過ぎていましたが、紅林さんが日本語の読み書きが苦手なことを知る先生が、「まだ間に合いますよ」と勧めてくれたそうです。当センター相談員を通じて詳細を知り、9月まで随時入学を受け付けているため、6月から入学することになりました。

中国でもほとんど学校に通ったことのなかった紅林さん。初めはわからないことだらけでしたが、国語や数学だけでなく、美術の時間の工作、音楽の時間の楽器演奏、校外学習でのバレー鑑賞など、新鮮な体験ができる中学校生活を楽しんでいます。



中国帰国者2世紅林義さん



学習サポーターとともに授業を受ける紅林さん

ひとつでもわかるとうれしい

星友館中学校では、それぞれの理解度、習熟度に合わせて6コースが設けられており、必要な人には日本語の支援も行われます。紅林さんの場合は、ボランティアの学習サポーターについてもらって、漢字の書き方や読み方を教えてもらったり、内容をかみ砕いて説明してもらいながら授業を受けています。毎日、何かひとつでもわかるとうれしい、と紅林さんは言います。

目標があるからがんばれる

星友館中学校で学ぶ紅林さんの目標は、日本語の読み書き能力を向上させて、普通自動車免許を取ること。「免許を持っていれば履歴書に書けるし、応募できる仕事も増える。わからないこと、難しいこともあるけれど、目標があるからがんばれる」。同じクラスの仲間もそれぞれの目的をもって学んでおり、「みんな同じだよ」と励まされた、と紅林さんは語ってくれました。

星友館中学校ってどんなところ？

～工藤真嗣校長先生に聞きました～



いつでもチャンスはある

星友館中学校には様々な年代と国籍の方が、学び直しや進学など、それぞれの目的をもって通っています。義務教育の年齢（15歳）を超えていれば、誰でも入学できます。生徒数は現在89名。最大120名までの受け入れが可能です。

基本的には昼間の中学校と同じ教科を勉強しますが、生徒の習熟度にかかなりのばらつきがあるため、学年別ではなく、コース別で授業が行われています。外国籍や外国にルーツのある生徒のため

に、日本語を重点的に勉強するコースもあります。学年は、それぞれの目的、進路に合わせて相談の上で決まります。例えば高校への進学を希望している場合は、初めから3年生に在籍し、一年間学んで受験することも可能です。最長6年間の在籍が可能です。進級や卒業も個別に相談しながら決めます。皆が遅れることなくついていけるように、ひとりひとりへの手厚い学習支援を心がけています。

生徒のみなさんの学ぼうとする意欲はとても高いです。また様々な苦勞を経験しているの、人の痛みがわかる人が多い。そのように多様な背景を持っている人たちが、互いを受け入れ合う環境の中で自分自身を取り戻し、能力を発揮し、自信をつけていく様子が見受けられます。

この学校が発信できることは、「いつでもチャンスはあるよ」ということだと思います。義務教育は一回だけですが、ここではやり直せる。義務教育未終了者や不登校経験者の学び直しの場と考えれば、夜間中学校ならぬ夜間小学校であってもいい。様々な人に機会を与えられる場所だと思います。

「ハンドマッサージ教室」

地域のつながりを生かして



6月14日に稚内で今年度初めての行事、健康増進プログラム「ハンドマッサージ教室」が開催されました。

日常生活の中でいつも使っている手ですが、その疲れをいやすセルフハンドマッサージを教えてもらいました。まず片方の手の指先から肘までのマッサージをし、していないほうの手と比べてみてから、もう片方もマッサージしました。指先には脳につながっている神経が多く、手を使うことで脳を活性化されることから、手は第二の脳とも言われています。また手をケアすることで血行が良くなり、むくみもとれるので、今日は教えてもらえてよかった、家でもやってみる、とみなさん、嬉しそうでした。

また今回の講師は、帰国者が教えるロシア語教室の生徒さんで、地域でのつながりを事業に生かすことができました。

編集後記

今回の知る集いでは、家族の存在、家族の思い、また家族への思いの大きさというものを強く感じました。語り部の熊谷さんが語り部となったきっかけのひとつが、満州からの引揚者であるご自身のお母様であったこと、お母様は満州のことはほとんど何も話さずに亡くなられ、満州のことを聞きたいという思いから、お母様と同じ年代の残留婦人のもとに通ったということも、個人的には強く印象に残りました。

ワイヤレスガイド貸し出し

聞こえづらいみなさんのために

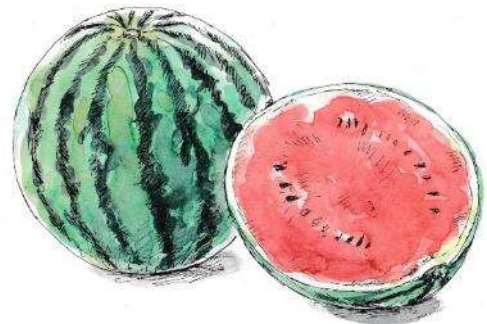


帰国者の高齢化が進んでいます。日本語教室でも高齢化への対応・工夫が求められるようになりつつあります。当センターでは、今年度

から日本語教室でのワイヤレスガイドの貸し出しを始めました。ワイヤレスガイドというのは、話し手の声を複数の人に送る無線通信



機です。授業のとき、講師が親機（携帯型送信機）を持ち、受講生が子機（携帯型受信機）を持つことで、聞こえづらい人でも講師の声を聞くことができます。使用した受講生には大変好評です。



8月・9月・10月の予定

8月11日～8月16日	日本語教室夏休み
8月16日	介護予防サロン（手稲前田）
8月21日	介護予防サロン（もみじ台）
9月13日	介護予防サロン（手稲前田）
9月18日	介護予防サロン（もみじ台）
9月23日～10月5日	日本語教室秋休み
10月16日	介護予防サロン（もみじ台）
10月18日	介護予防サロン（手稲前田）